対象別評価懸念の促進要因に関する検討

○白倉 瞳¹・濱口 佳和²

(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科・²筑波大学人間系)

キーワード: 評価懸念・小中学生・促進要因

Examination of risk factors that accelerate the fear of negative evaluation by object

Hitomi USUKURA¹ and Yoshikazu HAMAGUCHI²

(¹Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, ²Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba)

Key Words: fear of negative evaluation, elementary and junior high school students, acceleration factors

目 的

評価懸念は、「他者からの否定的な評価に対する心配, および否定的に評価されるのではないかという予測に対する不安の程度」と定義されており (Watson & Friend, 1969, p449), 不安障害 (Oei, Kenna & Evans, 1991), 抑うつ (Collins, Westra, Dozois, & Stewart, 2005; O'Connor et al, 2002), 摂食障害 (Gilbert & Meyer, 2005; Levinson & Rodebaugh, 2012) などの精神疾患のほか, 拒否児や無視児の地位 (La Greca, Dandes, Wick, Shaw, & Stone, 1988) といった社会的不適応との関連が明らかにされている。そのため, 評価懸念に焦点を当てた介入も視野に入れた知見の蓄積が必要であると考えられるが, 評価懸念の形成を促進する要因に関する検討はほとんど行われていない。

また, 従来の研究では, 評価懸念が生じる相手には「誰か」, 「他の人」, 「みんな」が想定されており, 評価懸念が生じる状況を「誰からの否定的評価を恐れるのか」という視点で区別した研究は見当たらない。そこで, 本研究では, 友人・親・教師に対する評価懸念 (対象別評価懸念) の促進要因として, 養育態度と対人経験に関して検討する。

方 法

調査対象 茨城県内の公立小学校に通う 5, 6 年生 113 名, 同県内の公立中学校に通う 1~3 年生 488 名, 計 601 名。
調査内容 (1)性別, 学年, お家の人の選択。(2)対象別評価懸念尺度 (白倉・濱口, 印刷中) 計 26 項目。(3)中学生用学校ストレスサ－尺度 (岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992) の「友人関係」と「教師との関係」16 項目。(4)内海 (2012) の CRPBI-108 の「拒否」, 「執行」, 「侵入性」18 項目。(5)中学生用 PBI (鎌谷, 2009) の過保護因子 13 項目。
調査手続き 無記名式の個別記入式質問紙を, 2014 年 5 月~9 月に実施した。

結 果

「友人との傷つき経験」は全ての対象別評価懸念と, 「教師との傷つき経験」は「教師に対する評価懸念」と関連を示し, 養育態度は「親に対する評価懸念」だけでなく他の対象別評価懸念とも関連を示す, というモデルを想定し, 男女別に共分散構造分析を行った。男子におけるデータとモデルの適合度指数は, $X^2=5.35$, p 値=0.07, GFI=0.99, CFI=1.00, AIC=91.35, RMSEA=0.09 であり, 女子におけるデータとモデル適合度指数は, $X^2=3.435$, p 値=0.18, GFI=1.00, CFI=1.000, AIC=89.44, RMSEA=0.06 であった。続いて, 多母集団同時分析を行い, 男女で同じモデルが適用可能かどうかを検討した。その結果, 等値制約を課したモデルは, $X^2=38.39$, p 値=0.01, GFI=0.98, CFI=0.99, AIC=178.39, RMSEA=0.05 であり, 等値制約を課さないモデルは, $X^2=8.79$, p 値=0.07, GFI=1.00, CFI=1.00, AIC=180.79, RMSEA=0.05 であったため, 制約ありモデルは棄却された。

また, 制約ありモデルの方が AIC の値は低かったものの, その他の適合度指標では制約なしモデルの方が十分な値が得られたため, 本モデルでは性差が見られると考え, 制約なしモデルを採用した。

1. 男子の結果

対人経験については, 「友人との傷つき経験」が全ての対象別評価懸念と有意な正の関連を示した (「友人に対する評価懸念」 $\beta=.33$, $p<.001$; 「親に対する評価懸念」 $\beta=.18$, $p<.01$; 「教師に対する評価懸念」 $\beta=.22$, $p<.01$)。

また, 養育態度のうち, 「拒否」が「友人に対する評価懸念」 ($\beta=.37$, $p<.001$) と「親に対する評価懸念」 ($\beta=.28$, $p<.05$) との間に有意な正の関連を示した。

2. 女子の結果

対人経験については, 「友人との傷つき経験」は「友人に対する評価懸念」 ($\beta=.28$, $p<.001$) と「教師に対する評価懸念」 ($\beta=.25$, $p<.001$) と有意な正の関連を示した。加えて, 「教師との傷つき経験」は, 「教師に対する評価懸念」と有意な正の関連を示した ($\beta=.14$, $p<.01$)。

また, 養育態度のうち, 「侵入性」が全ての対象別評価懸念と有意な正の関連を示した (「友人に対する評価懸念」 $\beta=.19$, $p<.01$; 「親に対する評価懸念」 $\beta=.20$, $p<.01$; 「教師に対する評価懸念」 $\beta=.16$, $p<.05$)。

考 察

本研究の結果から, 男女で対象別評価懸念の促進要因が異なることが明らかとなった。特に, 養育態度については, 男子では「拒否」が, 女子では「侵入性」が対象別評価懸念と正の関連を示した。男子で「拒否」のみ有意であったという結果は, 先行研究 (ex. Finnegan, Hodges, & Perry, 1998) とは異なる結果であるが, 拒絶的な養育態度と内在化・外在化問題との関連における性差に関して研究間で結果が一貫していないとの指摘もあるため (Hale, VanderValk, Akse, & Meeus, 2008), 今後知見の蓄積が求められるだろう。なお, 男女ともに「友人との傷つき経験」は多くの対象別評価懸念と正の関連を示しており, 仲間からの拒絶や無視, いじめ被害経験をきっかけにあらゆる対象への評価懸念が高まる恐れがあることが実証的に明らかにされたと言える。

引用文献

白倉瞳・濱口佳和 (印刷中) 小学校高学年および中学生における対象別評価懸念と適応との関連 教育心理学研究